



した。今月は、キリストの御降誕七百年以上前にイザヤが預言したメシヤ預言からキリストの全人類のための贖（あがな）いの死、受難を覚えたいと思います。

冒頭に引用したのは、イザヤ書の 苦難のしもべの詩（うた）で、「NIV」英語聖書のフルダによる邦訳を載せました。下線部は「日本聖書刊行会の新改訳聖書」との比較で訳が顕著に異なる部分で、[…] は NIV 掲載の別訳、(…) は注釈です。

この詩は 1. 52 : 13 - 15 頭（あらわ）された神の知恵、2. 53 : 1 - 3 さげすまれ、嘲（あざけ）られて、3. 53 : 4 - 6 打ち傷による癒（いや）し、4. 53 : 7 - 9 小羊のように、5. 53 : 10 - 12 栄光と誉（ほま）れの冠、の《五連詩》の形で構成されています。

1. しもべの人生の突然の逆転がもたらす驚異に、多くの国々、王たちがただ押し黙らざるを得なくなるような出来事が起ころうとしているという予告で詩は始まり、詩の最終段落で、「わたしのしもべは、賢くふるまうだろう。…非常に高められるだろう」と神が言われたことの意味、奥義が明らかになります。ここには、しもべの身に起こる辱（はずかし）めから後の高揚（こうよう）への驚異的な飛躍が、当初彼を汚れたものでもあるかのように見下していた者たちが、反対にこのしもべによって注ぎ聖められることになるという逆説を用いて、人間の思惟（しい）をはるかに越えた神の知恵の衝撃的なすごさとして描かれているのです。旧約時代、神の御前（みまえ）に出る人や物に注がれた 血、清めの水、油—汚れからの浄（きよ）め、聖別、契約のための「注ぎ」—を、このしもべが担（にな）うというのです。

2. 「主の御腕」がこのしもべに頭（あら）われたことが目撃者たち、すなわちイスラエルの民によって語られますが、異邦人が悟るようになるために主の証人として立てられたはずだった神の民自身が、実際には霊的に見えず、聞こえない者だったことに気づかされることとなります。しかしついに、神がこのしもべを通して成し遂げられたことを悟り、このしもべの苦難、死、高揚に頭わされた神の救いの力を理解したイスラエルの民は、今こそ力強い証人として世に送り出されていくことでしょう。このしもべは〈メシヤ〉に約束されてきた預言を成就する約束の子にふさわしく力強く成長するのですが、次第に「魅力も輝きもない」凡人同様になり、やがて皆が「顔をそむける」ほど嫌われ、さげすまれるようになります。そして自分たちもそのように彼を扱った一人であったと、証人たちは告白するのです。第三段落の「刺し通され、…砕かれた」には、暴虐（ぼうぎやく）による酷（むご）い死が描かれていますが、証人たちは初めそれがこのしもべにとって当然の死に方であるかのように思ったのでした。

3. このしもべが神の罰により当然の死に方をしたと思っていた証人たちの理解に、新しい光明が与えられます。それは、このしもべを敵に回した者たちや刑を執行した者たちは、神のご計画達成のための一手段として用いられたに過ぎず、このしもべを実際打たれたのは 神ご自身であったという驚くべき真理でした。このしもべがそのような苦しみ、悲しみ、辱（はずかし）めを経て、死へと追いやられたのは、彼がそのような死に相応しかつたからではなく、彼の悲しみ、苦しみ、死はすべて、証人として証言をしている者たち自身のため、何と自分たちの 身代わりの死だったのでした。イスラエルの民にとって〈身代わり〉〈犠牲の死〉という概念は決して新しいものではなく、モーセの律法の中に、小羊、山羊、牛など動物犠牲が人間の罪の代わりに捧げられることが定められていました。しかし今この動物犠牲による身代わりの原則が このしもべに適用され、犠牲になった彼の苦難と死を通して、民自身の 「そむきの罪」「咎」が赦（ゆる）され、反逆のゆえに絶たれていた神との関係が完全に正されるという前代未聞の和解が起こったのです。道を失い、羊のように路頭にさ迷っていた証人たちはみな、このしもべの命をかけた大変な犠牲、血の〈代価〉によって救い出されたことを悟ったのでした。

4. この段落では、主語は一人の証人になります。「燃えさかる炭」が口に触れたことによって劇的な罪の贖（あがな）いを体験したイザヤ自身の証言なのです。イザヤにとって、罪にどっぷり漬（つ）かった同胞イスラエルの民が、どのようにして罪贖（つみあがな）われるのかは、大きな関心事でした。果たして神はご自分の聖（きよ）さに妥協（だきょう）を許すことなく、このように罪に汚れた民を赦すことがお出来になるだろうか？ イザヤはこの疑問に対する答えがこの苦難のしもべにあることを悟ったのです。このしもべに酷（むご）くも下（くだ）された裁きは全く不当で、実際、「暴虐」も「欺き」も行なわなかったしもべが、「悪者」や貪欲な金持ちが懲（こ）らしめを受けるかのように犯罪人として裁きを受けたのです。二千年前、カルバリの丘で「神の小羊」として十字架刑に掛けられたイエス・キリストが裁きのため祭司長た

ち、長老たち、ローマ総督ピラトやヘロデ王の前に立たされたとき、どんな不利な訴えに対しても一言もお答えにならなかったのは、まさにイザヤの預言がナザレ人イエスにおいて成就したという証（あか）しでした。

5. それではこの忠実なしもべに、神はどのような最終評決を下されたのでしょうか。その答えはこの最終段落で明らかになります。この段落ではまずイザヤが証言をし、次に神ご自身が証言されます。しもべは死に留まるのではなく、甦らされ高められることになるのです。「罪過のためのいけにえ」として、このしもべの死は人々の罪を贖（あがな）うに十分なものでしたが、彼はそれ以上の驚くべきこと—新しいいのちを与え、「多くの者たちを義と（する）」という「まだ聞いたこともないこと」—をやり遂げたのです。したがって、最後まで神に忠実に賢く振舞ったこのしもべはすべての面で高められ、勝利の栄冠—「分捕り物」（命を得た者たち）—に与るのです。